SDGｓを中心とした音楽教育が
保育者養成課程の学生に及ぼす影響の検討
The Influence of SDG-Centered Music Education on Students in Childcare Training Programs

小餅谷 哲男　高木 悠哉　名須川 知子
KOMOCHIYA Tetsuo　TAKAKI Yuya　NASUKAWA Tomoko

＜要旨＞
SDGsは幼児教育・保育における２要領１指針（幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領）の中で、これらかの子ども達に育まれるべき概念として重視されている。そのため、保育者養成課程の講義内で保育者を目指す学生に対しても、SDGsを踏まえた講義が取り組まれている。ただし、音楽教育の中で音楽と SDGs とのつながりを意識した講義は、現在まで研究が少ない。本研究では、保育内容（音楽表現）の講義の中で、子どもの歌唱曲の中にSDGsの要素を見つける取り組みから、保育者養成課程の学生に、どのような保育における音楽とSDGsの繋がりがもたらされるかについて、事例的に検証することを目的とした。
キーワード：音楽表現、保育者養成、SDGs

Ⅰ．SDGs・ESDと保育者養成課程の講義

人類が地球の様々な資源を消費し社会生活を行っていく中で、それに伴う様々な問題が深刻化している。二酸化炭素の排出量の増加と森林伐採などに伴う地球温暖化、それにより世界中で自然災害による被害がもたらされている。人類が消費する食料に関しても、環境破壊の影響が日増しに増加しており、世界的な人口増加と相まって、人類の将来に暗雲が立ち込めている。また、経済的な成長を求める世界各国の取り組みに伴い格差や貧困が深刻化し、さらには国家間の平和維持にも問題が生じている。一人の人間としての社会生活に目を移せば、ジェンダー平等や働き甲斐のある仕事の確保といった、将来を幸せに生きるための条件が脅かされている。

これらのような、現代社会の課題に対処するため、2015 年 9 月の国連総会で採択されたのが、持続可能な開発（Sustainable Development）のための 2030 アジェンダである（国連総会, 2016）。そこでは、具体的に 2030 年までに達成すべき 17 の目標とその下位目標である 169 のターゲットが示されており、これを持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: 以下 SDGｓと表記）と呼ぶ。

日本政府は、2016 年より内閣総理大臣を中心に SDGｓ対策推進本部を設置し、SDGｓの課題に対して経済、社会、環境の３側面から統合的に取り組んでいくための「SDGs 実施指針」を示し、定期的に改定を進めている（内閣 SDGs 推進本部，2019）。その最新版である 2023 年の実施指針案によれば、国民の SDGs 認知度は 9 割に達しており、国家レベル、地方レベル、民間ビジネス、国際協力の 4 つの分野で、日本の SDGs の取り組みが強化・発展してきている

ことが示されている（内閣 SDGs 推進本部，2023）。改定案には、教育機関に期待される役割として、「持続可能な社会の創り手を育成するという観点から」、「地域や世界の諸課題を自分ごととして考え課題解決を破格人材の育成に寄与」と記載されている。

就学前教育では、2017 年、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府・文部科学省・厚生労働省、2017；以下、2 要領 1 指針と略）が改定された。改訂のポイントとしては、子ども達に育って欲しい 3 つの資質・能力(①知識及び技能の基礎、②思考力、判断力、表現力等の基礎、③学びに向かう力、人間性等)が明記されるとともに、これらを基盤とする、「幼児期の終わりまでに育って欲しい 10 の姿」が示されたことである。このような力は、「SDGs の全ての目標の達成の基盤を作る極めて重要な枠割を担っている（内閣 SDGs 推進本部，2023）」と考えられており、そのために、保育場面においても、各学校段階で盛んに取り入れられている、持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Goals）が求められている。ここから、子ども達に ESD に基づく保育実践が重要であり、また、それを支える保育者を養成する各機関でも、学生に対して SDGs への理解と保育実践への適用を考える講義とともに、ESD を推進していく必要性があると考えられる。

保育場面及び保育者養成課程における ESD 実践に関して、篠崎・安達（2021）は、2008 年から 2020 年 12 月にかけての、保育領域「環境」分野における幼児期の ESD に関わる国内論文について、内容整理を行った。結果として、43 本の論文が抽出された。その中で、幼児を対象とした国内の実践分析が 8 本、実践研究が 4 本と計 12 本の研究論文が認められたのに対し、保育者養成課程での ESD 実践の取り組みは 4 本の論文数に留まった。論文数で一概に判断することは難しいが、研究として保育者養成課程での実践は領域「環境」においては少数であることが伺える。その一方で、5 領域（健康・環境・言葉・人間関係・表現）における環境以外の領域で、保育者養成課程での ESD を取り扱った研究はなお少数である。たとえば、領域「健康」や領域「言葉」では、著者の検討では研究論文は認められず、領域「人間関係」では山村（2019）による、当該領域を受講する学生のレポート分析から人とのつながりが重要であることが見いだされ、領域「人間関係」での ESD の必要性について考察した研究が認められるのみである。実際の保育では領域ごとに独立したねらいで保育実践をするのではなく、一体的に育んでいくであろう。そのため、領域を限定せず、演習型の科目として保育者養成課程に SDGs に関わる実践を取り入れる試みと、それが学生に及ぼす効果分析も近年なされている（山本，2022：小松，2022：矢野・田爪・吉津，2023）。しかしそれでも、このような取り組みと併せて、各領域の専門性涵養の点から、領域ごとの科目でも ESD や SDGs と領域との繋がりを意識する講義が必要である。

国民の SDGs の認知度が非常に高いことを勘案すれば、保育者養成課程の大学生は SDGs を理解しており、また、それまでの学校段階で ESD に数多く触れていると考えられる。しかし、保育実践において、SDGs の観点から保育を行うことについては、そのような教育を必ずしも受けていないことが考えられる。理論研究の観点から、保育者が ESD に関する特別な訓練を受けた結果、ESD を意識的に乳幼児教育・保育へ取り入れている訳ではないとの指摘もある

（加藤，2016）。実際に、谷口（2020）は、保育者養成課程の領域(環境)で用いられている教科書の約半数において、ESD という言葉や概念が記述されていないことを指摘している。また、従来から日本の保育は持続可能な開発を内包しており、今後の課題は保育者自身が保育と持続可能な開発との繋がりを意識し、実践していくことと指摘も認められる（上垣内，2018）。これからの保育者養成には、子ども達が生きる未来の社会がどのように幸福であるかについて、SDGs の視点から指針を持ち、それを日々の保育実践に還元できる能力が求められる。それは、保育者養成課程の講義全体で取り組むべきもの重要な課題である。

Ⅱ．SDGs・ESD と保育者養成課程の領域「音楽表現」

上述してきたように、領域「環境」以外の 4 領域で、保育者養成課程での SDGs および ESD を踏まえた講義に対する研究は極めて少ない。同様に、保育者養成課程の音楽表現の講義内にそれらを導入した研究論文は著者の検討の限り見当たらない。ただし、いくつかの研究から保育者養成課程の音楽教育に SDGs および ESD を取り入れる必要性は示唆されている。第 1 に、学校段階における音楽家教育に ESD が関連しているという論文が挙げられる。たとえば、伊藤・吉田（2023）は、持続可能な社会づくりの構成概念を音楽科教育でどのように扱うかについて、6 つの構成概念それぞれに対応する、音楽科教育の目標を提案した。また、小学校音楽科の目標に SDGs が関連していることを指摘し、「音楽科が他教科に比べ、授業で得た知識・技能を、表現活動などにおいて活発に使うことで、子どもたちの SDGs に対する興味、理解がより深まる」と考察している。また、宮下・大熊（2013）は、中学校音楽科鑑賞領域での ESD として獲得が期待できる力について整理し、その獲得に至るまでの音楽家授業の立案例について提案している。これらの研究は学校段階の音楽科教育の知見であるが、幼少接続の観点から考えても、幼児期から音楽と SDGs を関連づけること、また音楽表現に ESD を取り入れることで、持続可能な社会の担い手となる基盤を作ることは必要であろう。

第 2 に、より直接的に保育者養成課程の音楽表現に SDGs および ESD を取り入れる必要性を考察した研究が挙げられる。たとえば、みやざき（2022）は、幼稚園などで歌われる子どもの歌と SDGs の 17 の目標との関連について分析した結果、「子どもの歌の歌詞の内容や活動内容を考えたとき、複数の SDGs に該当するものがいくつも存在した」ことを示した。みやざき（2022）は同様に、国立教育政策研究所（2012）による持続可能な社会づくりの構成概念 6 項目（多様性、相互性、有限性、公平性、連携性、責任性）を参照した独自の項目が、領域「音楽表現」の教科書 9 冊の中にみられるかを分析した。結果として、持続可能な社会づくりの構成概念は、教科書内で確認されたが、SDGs および ESD の文言はどの教科書にも認められなかった。彼女は、考察として、「領域「音楽表現」の活動や指導方法は、SDGs を達成するための教育の方向性にも準じている」が、「具体的に SDGs と関連づけて教育が展開されている可能性は極めて少ない」と論じている。

Ⅲ．本研究の目的

本研究の目的は、保育者養成課程の音楽表現の講義に、SDGs の視点を取り入れることが、学生に及ぼす影響について探索的に検討することである。見てきたように、このような実践の効果を分析する研究は現在まで認められておらず、その方法論については探索的となる。本研究では、みやざき（2022）を参考に、いくつかの子どもの歌を実際に歌唱したのちに、その歌詞の中にSDGsおよび持続可能な社会づくりの構成概念を学生がどれだけ発見できるか、また、歌唱の後に、それを子ども達にどう伝えるのかの具体例が思い浮かべられるかについて検討する。

同時に、領域「音楽表現」に基づき子ども達と歌唱する際に、SDGs の観点を子ども達に考えてもらうことがなぜ大切かについて、学生が具体的にイメージを持つことが可能かについて分析する。

Ⅳ．方法

研究参加者　私立大学の保育者養成課程に所属する大学 2 年次生 36 名を対象とした。

対象講義および期間　保育領域「音楽表現」の講義内で「子どもの歌と SDGs」という回を設定し 10 月に実施した。

手続き　講義の最初に、動画資料により保育園で行われている SDGs 活動について、特定の園の実践を取り扱ったニュースを学生に視聴させた。内容としては、環境問題への理解、フードロスの削減、作農体験などに関する、実際の子ども達の取り組みを紹介するものだった。その後、講義担当者より、歌唱場面における SDGs について動画内では紹介されていなかったことを示し、講義の目的は子どもの歌の中に SDGs を発見できるか、また、子ども達にそれをどう話していくか、ということであると伝えた。その後、SDGs の 17 の目標と持続可能な社会づくりの 6 つの構成概念について資料を用いて説明した。

説明の後、3 曲の子どもの歌の歌詞を紙媒体で示し、講義担当者の伴奏により、歌唱を行なった。歌唱終了後に、それぞれの歌詞のどの部分が SDGs のどの目標に該当し、持続可能な社会づくりの構成概念のどの概念に相当するのかについて、ワークシートを使用して記入させた。その際、子ども達と歌唱した後に、どのように SDGs について話をするかについて記入を求めた。最後に、保育において、音楽で SDGs について子供達に考えてもらうことが、何故大切かについて学生に自由記述で意見を記入させた。

使用楽曲　研究で歌唱し、歌詞から SDGs を見つけ出す取り組みに使用した楽曲は、①「にじ」（作詞：新沢としひこ、作曲：中川ひろたか）、②「世界中の子どもたちが」（作詞：新沢としひこ、作曲：中川ひろたか）、③「手をつなごう」（作詞：中川李枝子、作曲：諸井誠）の 3 曲であった。

Ⅴ．結果および考察

表 1 に、3 楽曲の歌詞から学生が対応する記述した SDGs 番号の総数を示す。なお、各歌詞

から対応するSDGs番号は、複数回答が可能であったため、参加者数を超えた総数となる。最初に、3楽曲のそれぞれについて、学生が歌詞から多くのSDGsの目標を関連づけていることが示された。楽曲「にじ」では、17の目標のうち13の目標を歌詞と関連づけており、楽曲「世界中の子どもたちが」では11の目標、楽曲「手をつなごう」では16の目標と関連づけられている。みやざき（2022）は、歌詞に複数のSDGsに該当すると考えられる子どもの歌が多く存在することを指摘したが、保育者養成課程の学生であっても、歌詞から複数のSDGsを想定することが可能であることが示されたと言える。

表１　３楽曲の歌詞から学生が対応すると記述したSDGs番号の総数（複数回答可）

	にじ	世界中の子どもたちが	手をつなごう		にじ	世界中の子どもたちが	手をつなごう
目標１：貧困をなくそう	5	18	9	目標11：住み続けられるまちづくりを	1	1	4
目標２：飢餓をゼロに	0	0	17	目標12：つくる責任つかう責任	4	0	8
目標３：すべての人に健康と福祉を	18	7	7	目標13：気候変動に具体的な対策を	45	13	7
目標4：質の高い教育をみんなに	5	7	4	目標14：海の豊かさを守ろう	0	30	7
目標５：ジェンダー平等を実現しよう	5	11	11	目標15：陸の豊かさも守ろう	1	11	22
目標６：安全な水とトイレを世界中に	0	0	19	目標16：平和と公正をすべての人に	31	22	8
目標７：エネルギーをみんなにそしてクリーンに	13	0	0	目標17：パートナーシップで目標を達成しよう	4	3	5
目標８：働きがいも経済成長も	0	0	5				
目標９：産業と技術革新の基盤をつくろう	4	0	3				
目標10：人や国の不平等をなくそう	11	27	14				

楽曲「にじ」に関してワークシートの自由記述をもとにKH corder（樋口，2020）を用いて共起ネットワークを描いた結果を図１に示す。ワークシートでは、「子どもたちと歌った後、どのように子どもたちにSDGsについてお話しするか」を記述させた。楽曲「にじ」ついては、8のカテゴリーで構成された。最も出現頻度が多かったのは「天気」であり、C4のカテゴリーに属している。このカテゴリーからは、天気が、元気、活動、歌、大切、聞くといった言葉とともに出現していることが分かる。「にじ」に歌詞の最終節の「きっとあしたはいいてんき」から、自然を大切にするために、天気を観察してみよう、といった話しをする記述する学生が多かった。次に出現頻度が多かったのは、「自然」であり、C3のカテゴリーに属している。C3では、自然を大切にするとともに、自分の身に周りをきれいに保とうという、自然保護の重要性と子ども達の生活習慣の確立をつなげようとする記述が特徴的であった。その際には、「にじがにじが」という歌詞から、虹の美しさについて子どもたちと話す事を重要視する記述が多くみ

られた。表 1 より、「にじ」の歌詞から最も学生が想定した SDGs の目標は 13 の「気候変動に具体的な対策を」であったことから、目標 13 と「にじ」の歌詞を結びつけ、子ども達に話すと考えた学生がこれらの記述を行なったと考えられる。その一方で、直接に気候変動について子ども達に尋ねる内容の語で構成されたのは C6 である。ただし、これらの記述を行なったのは 2 名と少数であった。つまり、直接に子ども達に「にじ」から気候変動に繋げるのは、発達段階を踏まえて難しいと考え、言葉をより子ども達に伝わるように工夫する事を学生が思考したことが示唆される。同様に 2 名と少数であるが、「にじ」の歌詞の「あめがあがって」に注目して、水や生き物を大切にしようとする記述も見られた。

また、C1、C2、C5 は、目標 16「平和と公正をすべての人に」、目標 10「人や国の不平等をなくそう」、目標 3「すべての人に健康と福祉を」を組み合わせて子ども達に話すという内容の語によって形成されている。これらも、学生が歌詞から想定する SDGs の目標で記述の頻度が多かった目標であり、想定した目標と対応したお話しを歌唱後に子ども達にしようとする記述が見られた。2 名の参加者は、C9 のカテゴリーに属する「世界共通で嫌なことがある」という記述を行なったが、その内容は目標 3 に繋がるものであり、嫌なことがあっても良い方に行くので、手を差し伸べることが大切といったものであった。C8 のカテゴリーで自分たちにできる事をするといった語の繋がりが見られたことから、SDG に関連して、自分達が活動を起こそうと促す事を記述していた。

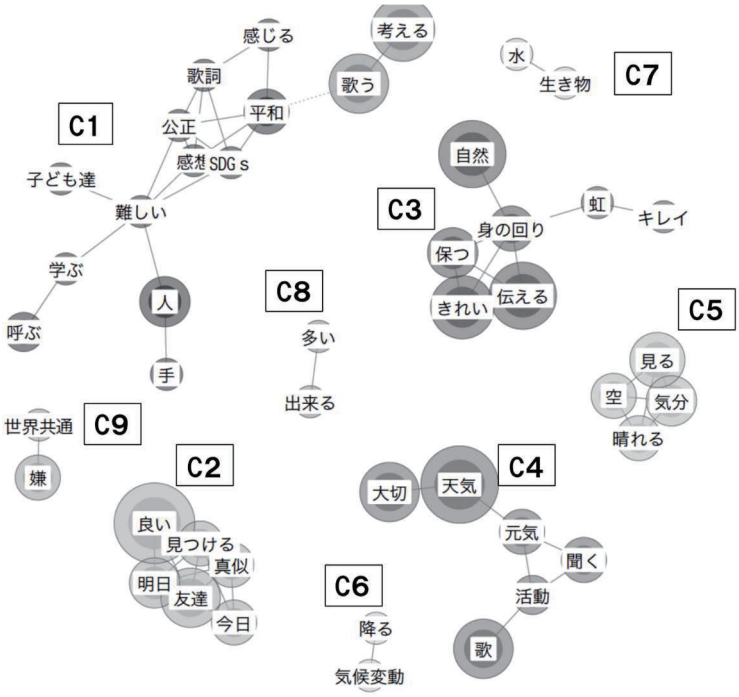

図１　楽曲「にじ」歌唱後に子ども達に話すSDGsの内容に対する共起ネットワーク分析の結果

楽曲「世界中の子どもたちが」に関してワークシートの自由記述をもとに共起ネットワーク

を描いた結果を図 2 に示す。「にじ」と同様に、表 1 より学生が歌詞から想定する SDGs 目標の中で、もっと生起頻度が高かった目標 14「海の豊かさを守ろう」に関する語である「海」が出現頻度が高く、歌詞に対応して「泣く」「笑う」と繋がり C1 のカテゴリーを形成していた。この後が出現する文章の内容としては「なぜ海が泣いているのかを、環境汚染などの写真を見せることで考える」といった目標 14 に対応するもの（C5 のカテゴリーにも見られる）と、どこかの国で誰かが泣いているという歌詞「せかいじゅうの子どもたちがいちどにないたら」から目標 10「人や国の不平等をなくそう」を考えるという記述を行った者の 2 つのパターンが見られた。目標 14 に関しては、目標 10 に関しては、歌詞から 2 番目に多く想定されると記述されたものであり、C2、C3、C4 のカテゴリーも、目標 10 から想定される語のつながりが見られた。

また、歌詞「せかいじゅうのこどもたち」から、世界の子ども達に目を向け、貧困や飢餓について話すと記述したのが、C7 のカテゴリーに見られた。さらに、歌詞「さかせようぼくらのはなを」から、目標 10 と目標 5 を関連づけ、髪の色や肌の色、ジェンダー平等について話しをするという記述も見られた。

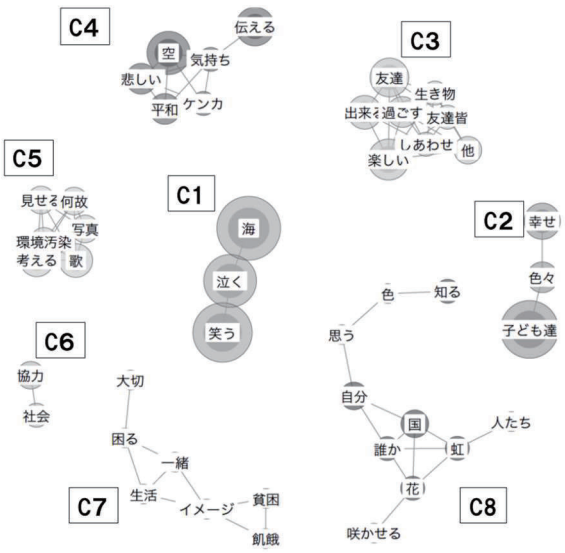

図 2　楽曲「世界中の子どもたちが」歌唱後に子ども達に話すSDGsの内容に対する共起ネットワーク分析の結果

楽曲「手をつなごう」に関してワークシートの自由記述をもとに共起ネットワークを描いた結果を図 3 に示す。この楽曲は、歌詞「せかいじゅうの子どもたちがいちどにわらったらうみもわらうだろう」という歌詞から、多様な SDGs の目標を想定する学生が多く表 1 によれば目標 7 以外のすべての SDGs 目標について、対応すると回答した学生が存在した。そのため、C1 のカテゴリーで「手」「大切」「伝える」という語が出現頻度が高く繋がりを持っているが、その内容は、目標 10、13、14、15、16、17 と言った多様なイメージを持ち学生が話をすると回答していた。そして、C3 のカテゴリーに属する語も生起頻度が高く、目標 10、16、17 に対応して、苦手なお友達とも助け合って仲良くすることに挑戦する、といった内容であった。そ

れに関連して、出現頻度は相対的に低いが C5、C6、C7 のカテゴリーでも、違う見方を許容する、力を合わせて解決する、世界について考える、と言った語が繋がりを持って記述されていることが示された。C2 のカテゴリーは 4 名の学生が記述しており、「うみも泣くだろう」という歌詞から、自然を大切にすることの重要性をイメージし、子どもたちに伝えようとすることが示された。

以上のように、SDGs についての講義を行い、歌唱することによって、3 つの楽曲それぞれで、歌詞から多くの SDGs の考え方をイメージすることが可能であり、また、それぞれについて、子ども達に具体的にどのように話すかについての方略を考察可能であることが明らかとなった。みやざき（2022）は、こどもの歌には、全ての SDGs が取り入れられている可能性を指摘し、指導者が SDGs との関連性がある事を知った上で、こどもの歌を扱うことの重要性を指摘している。この点、本研究で用いた講義形式は、こどもの歌と SDGs との関連性をこれからの保育者に涵養する事につながるということが、本研究の結果から示唆される。従来から、主として領域「環境」で積極的に取り入れることの重要性が示唆されていた、保育における SDGs の観点は、領域「音楽表現」でも可能であることが明らかとなったと考えられる。

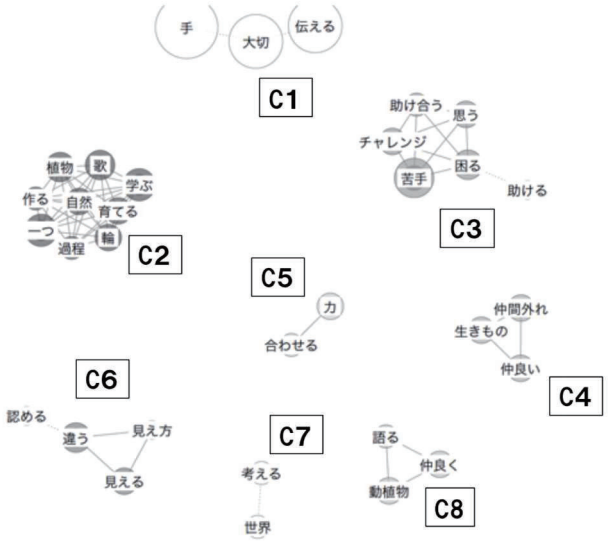

図３　楽曲「手をつなごう」歌唱後に子ども達に話すSDGsの内容に対する
共起ネットワーク分析の結果

表 2 に、3 楽曲の歌詞から学生が対応すると記述した持続可能な社会づくりの構成概念の総数を示す。結果として、全ての楽曲で、6 つの構成概念の全てを歌詞から学生は対応すると記述していた。この 6 つの概念は、学校段階の各教科等の授業の中で ESD の視点に立った学習を展開するための目標として考えられている（国立教育政策研究所，2012）。今回、全ての構成概念を学生が歌詞から想定できたことは、学生の感性が過去の学校段階での ESD によって涵養されていた事を示唆するとともに、保育者養成課程の音楽教育による ESD に、子どもの歌を取り入れることの重要性を改めて示唆するものとなったと考えられる。宮下（2019）による

「ESD としての音楽授業実践ガイドブック」では、音楽科で持続可能な社会づくりの構成概念を扱う際の具体例を示した（表 3）。本研究の方法は、歌詞から持続可能な社会づくりの構成概念を見つけ出す取り組みであり、宮下（2019）の想定したような目標に関して、学生に涵養することを目指すものではなかった。ただし、最終の振り返りの分析によって、このような観点が学生に得られたかを考察することが可能である。そのため、「保育において、音楽で SDGs について子どもたちに考えてもらうことが、なぜ大切か、授業の体験から自身の意見をまとめよう」という自由記述の回答結果に対して、共起ネットワーク分析を行った結果を示す（図 4）。

表２　３楽曲の歌詞から学生が対応すると記述した持続可能な社会づくりの構成概念の総数（複数回答可）

	にじ	世界中の子どもたちが	手をつなごう
多様性	50	52	28
相互性	26	31	44
有限性	17	6	18
公平性	42	57	47
連携性	28	52	42
責任性	10	12	14

表３　ESDとして音楽科で持続可能な社会づくりの構成概念を扱う場合の例（宮下，2019より引用）

多様性：いろいろ音楽があること、いろいろな感じ方があること
相互性：音楽はいろいろな要素が関わり合ってできていること、音楽を通していろいろな人々が楽しい気分になれること
有限性：伝統音楽は人々が大切にしていかないと存続できないこと、音楽によって平和な社会を存続していくことができること
公平性：芸術や音楽は全ての人々にとって等しく価値あるものであること
連携性：音楽によって様々な人々と繋がることができること、各パートが協力しあって一つの合唱を作り上げていくこと
責任性：豊かな社会をつくっていくために、一人一人が音楽を尊重したり楽しんだり音楽文化を継承・発展していくこと

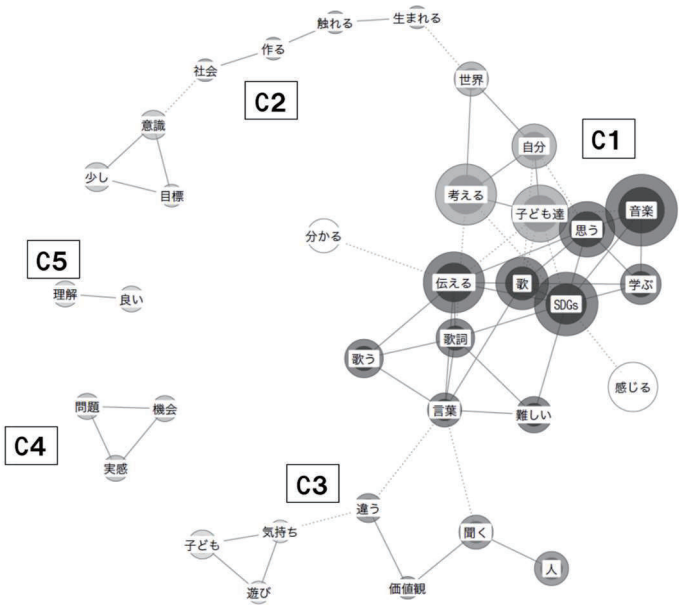

図４　保育において、音楽でSDGsを子ども達に育むことが重要な理由に対する共起ネットワーク分析の結果

C1 カテゴリーは、SDGs を音楽で考えることの利点についての語のつながりで構成された。学生の自由記述から、音楽は言葉で伝えるよりも SDGs を分かりやすく子ども達に伝えることができ、記憶に残りやすく、どのような取り組みをしていきたいかという感情が自然に生まれてくる、といった利点が挙げられていた。C2 は、「社会」「意識」「世界」「触れる」「生まれる」という語の繋がりで構成され、音楽を通してこれからの社会を作っていく子ども達が世界や社会に関してふれ、意識する機会となるという自由記述の内容であった。C3 は「価値観」「違う」「聞く」「子ども」「気持ち」などの語の繋がりで構成され、自由記述の内容としては、音楽を聞いてもらう事で、人との価値観の違いを子ども達がより素直に受け入れられるのでは、といったものであった。C4 は、「機会」「実感」「問題」という語で構成され、音楽から SDGs を考えることは、子ども達が問題を実感する良い機会になるという自由記述の内容だった。C5 は、「理解」「良い」で構成され、SDGs に対するより良い学び、理解に音楽が寄与するという内容の自由記述であった。

このような、図 4 の分析から、宮下（2019）が例示との関連が見られたと考えられる。例えば、音楽科による持続可能な社会づくりの構成概念の涵養における多様性や連携性に関連した目標について、類似した記述を学生が行なっていた。ただし、その他の項目との関連は本研究では認められず、むしろ、音楽を通して SDGs への子供達の理解がより直感的で容易くなるといった、利便性に対する記述が大部分であった。つまり、本研究の講義形式では、ESD は部分的にしか達成できないことが示唆される。

宮下（2019）では、教員養成校での ESD 実践として、わらべうた関連教材を開発し、楽曲鑑賞と、原曲旋律の構成音を使用した創作活動行わせた。その後、アンケート調査を実施し、わらべうたに対する記憶や意識の変化について分析した。結果として、わらべ歌の中にある文化性を学生は認識し、主として文化性や伝統性の観点から、ESD が成立したと考察している。本研究の講義形式と、宮下（2019）の ESD 実践を組み合わせる事により、保育者の資質・能力として SDGs の理念がより学生に涵養させることができる可能性があるため、今後の検討課題であると考えられる。また、本研究は、領域「音楽表現」における、SDGs を中心とした保育実践に対して、何らかのモデルケースを学生に提示したものではなかった。そのため、学生には、実際にはどのように保育するのかについて、イメージを持ちにくいことが問題点として挙げられる。そのような保育実践のモデルケースの開発及びその効果に関しては、現在まで研究が認められないため、今後の研究の進展が臨まれる。また、楽曲から自由にイメージした SDGs の観点について保育実践を行って良いのか？という課題もある。なんでもありの ESD が従前批判に晒されるように、SDGs が前面に出すぎて、大切な楽曲自体のイメージが失われてしまうことがあっては、子ども達の感性を育むことが犠牲となり本末転倒である。この観点からの基礎研究も不足しており、今後発展させる必要がある。ただし、本研究のまとめとして、保育者養成課程の学生は、楽曲から SDGs を具体的にイメージすることが可能であり、また、それを保育実践することの意義も理解していることも事実である。保育者養成課程の講義では、このような講義形式が必要であるが、保育実践としては、特段の SDGs の観点を前面に押し出

さずとも、子ども達はそれぞれの豊かな感性から SDGs 理解を深めていく可能性があるため、保育者への SDGs の涵養が保育実践にどう表現されていくのか、今後検討していくことが求められる。

著者名と担当分担

小餅谷 哲男　桃山学院教育大学教授（研究計画、データ収集、序論の一部執筆、論文全体の校正）

高木 悠哉　　桃山学院教育大学准教授（方法、結果、考察の一部執筆、データ分析）

名須川 知子　桃山学院教育大学教授（研究推進の統括、序論・考察の一部執筆、論文全体の修正・校正）

【引用文献】

伊東陽・吉田秀文（2023）. SDGs・ESD 時代における音楽教育の現状と課題 ―「誰一人取り残さない」社会の構築に向けての音楽教育の役割とは― 群馬大学共同教育学部紀要. 芸術・技術・体育・生活科学編 58, 1-8.

加藤望(2016). 日本の乳幼児教育・保育における持続可能な開発のための教育（ ESD ）の現状と課題 愛知淑徳大学論集. 福祉貢献学部篇 6, 89-96.

加藤望(2016). 日本の乳幼児教育・保育における持続可能な開発のための教育（ESD)の現状と課題 愛知淑徳大学論集. 福祉貢献学部篇 6, 89-96.

国立教育政策研究所（2012). 学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究 最終報告書 http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_saishuu.pdf （2023 年 11 月 1 日最終閲覧）

国連総会（外務省仮訳）(2016).「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」 https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html （2023 年 11 月 1 日最終閲覧）

小松陽子（2022). SDGs を意識した幼児教育・保育について ： 生きた「ものづくり」プロジェクト実践報告 香川短期大学紀要, 50, 137-145.

篠﨑正典・安達仁美（2021). 幼児期における「持続可能な開発のための教育」(ESD)の研究動向－領域「環境」の役割を視野に入れて－ 信州大学教育学部研究論集, 15, 188-199.

谷口一也(2020). SDGs 時代の幼稚園教育領域「環境」のあり方 教育総合研究叢書 13, 137-146.

みやざき美栄(2022). SDGs から捉える領域【表現（音楽)】の一考察 鈴鹿大学短期大学部紀要 5, 113-128.

内閣 SDGs 推進本部（2019). 持続可能な開発目標（SDGs）実施指針決定版 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/pdf/jisshi_shishin_r011220.pdf （2023 年 11 月 1 日最終閲覧）

内閣 SDGs 推進本部（2023). 持続可能な開発目標（SDGs）実施指針改定案 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/pdf/jisshi_shishin_r011220.pdf （2023 年 11 月 1 日最終閲覧）

内閣府・文部科学省・厚生労働省(2017). 平成 29 年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本 フレーベル社

樋口耕一 (2020). 社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第 2 版 ナカ

ニシヤ出版
宮下俊也・大熊信彦（2013）．ＥＳＤ（持続発展教育）としての音楽科教育　－中学校鑑賞領域の場合－　奈良教育大学紀要．人文・社会科学　62(1)，207-218.
宮下俊也（2019）　ESD としての音楽授業実践ガイドブック-小学校・中学校・高等学校・教員養成大学- 平成27～30 年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究成果報告書
矢野真・田爪宏二・吉津晶子（2023）．就学前教育・初等教育における ESD 実現のための木育教材の開発 ： 木のコマを用いた教材の研究，京都女子大学発達教育学部紀要，19，263-272.
山村けい子（2019）．保育内容「人間関係」 ： 持続可能な開発のための教育(ESD)の観点から　兵庫大学短期大学部研究集録，54，9-18.
山本一成（2022）．保育者養成における ESD 教材作成のプロジェクト型演習　滋賀大学環境総合研究センター研究年報，19，83-91.